

小金井市農業振興計画策定に関するヒアリング（中間報告②）

【体験型市民農園等】

ヒアリングにご協力いただいた方：

- ・高橋 堅治 氏（たかはしファーム 園主）
- ・鈴木 由美子 氏（ベルファーム 園主）
- ・日並 洋一 氏（みみコン eco 畑 園主）

2 現状と課題

2-1 営農・経営

- ◆地産地消は、物流コストをかけずに、新鮮で、安全安心な農産物の提供を可能にする。そのことを農業者としても意識をし、減農薬・無農薬での生産に努めている。
⇒100%無農薬は難しくても、より安全な農薬（または農薬に代わるもの）を利用する等、工夫することはできる。

2-2 販売・流通

- ◆ファーマーズ・マーケットにくる顧客はリピーターが主であったが、最近は新規顧客も増加しているように感じる。
- ◆直売所だけでは顧客数含め限界があるため、販売網を複数持つようにしている。
- ◆市内のスーパーの中には、地場産野菜コーナーを設けて、生産者の顔を見える化しているところもある。

2-3 農 x ○○

- ◆時間を経て、農園がコミュニティの場（居場所）になってきたように感じる。利用者からも「畑に来ると誰かに会える」や、「定年後、地域に知り合いがいなかったのでありがたい」等の声がある。
- ◆農工大とは、ミミズコンポストの設置について依頼したことがきっかけでつながりができた。農工大の技術指導員の協力の基で栽培計画を作っている。
⇒同大学では、学生による自主ゼミ「ミミズコンポスト管理局」によって大学の食堂で出た生ごみ等を利用した実験を行っている。現在、農工大の自主ゼミの学生6、7人がアルバイトとして農園の手伝いをしている。
- ◆子どもは農園で土遊びや水やり、収穫等を楽しんでいる。生ごみを持ってくる親子もいる。
- ◆利用者からは、「スーパーの野菜とは味が違う」、「子どもがトマトを食べられるようになった」「子どもを安心して遊ばせることができる」等の声が上がっている。
- ◆食の安全安心の推進を目的とした組織を設立し、全国規模で賛同者を集めながら「人にやさしいもの」を認証していく活動を始めた。今後、小金井市においても、安全安心な食の提供に取り組んでいる農業者や飲食業者等を認証する等、活動を広げていく予定である。
- ◆同組織の取組として、市内のレストランで、生活に困っている家庭の子ども等を対象とした食事を提供する事業を開始する予定である。持続可能な取組とするため、活動に賛同する方による寄附をお店に預け、その費用を基に困っている子どもに安全安心な食事を提供するしくみとなるよう準備を進めている。

2-4 農の体験・援農

- ◆援農スタッフは15～16人で、20年近く通っている人もおり、高齢化が進んでいる。農地で体調を崩してしまう方がいたり、慣れによる意思疎通の希薄さ等が問題である。
⇒40～50代で手伝いたいといってくれる人もいるが、高齢の方も継続を希望しており、対応が難しい。

【体験型市民農園の運営】

- ◆区画ごとに班分けし、班長を中心に班ごとで農作業をしている。
⇒畑に行けないときは、班のメンバーに自分の区画の作業を頼む等、協力関係も見られる。
⇒班で動くと、新規利用者が作業に乗り遅れてしまう等の問題もあるが、しばらくすると出来るようになる。
- ◆利用者との連絡手段として、メーリングリストを活用している。
⇒メーリングリストでの連絡は、メールが読まれているか分からない。既読確認できるLINE等のSNSは、利用していない人もいるため使えない。
- ◆野菜が育つところ、育たないところで生産にバラつきが出てしまう。収穫量の平均を保つために、園主の畑の野菜を分けることもある。
- ◆各利用者に、同じ質の苗を同じ数、配布しなければならない。作付計画に基づき、一人で全員分の苗を作る作業が最も大変である。
- ◆害獣被害を懸念している。多少の被害であれば、園主が作った野菜を分けることができるが、全滅してしまうと弁償しきれない。
- ◆自分の区画以外の野菜を持って行ってしまう人がいる。
⇒信頼関係が崩れてしまい、自分の区画の野菜を取られた人がやめてしまう。今までは個々のモデルに任せていたが、今後は対策を考えなければならない。
⇒自分の出荷用の野菜を分けるようにしているが、販売利益の損にもなるため対応しきれない。
- ◆農作業が体力的に難しくなっている参加者や問題のある参加者に退園を促すのは難しいため、5年毎等に契約を見直せるシステムがあると運営しやすい。
- ◆近所から騒音に関する苦情があり、近隣の住宅から少しだけ離れた場所に農園を移動したことがある。
- ◆利用者が近所の敷地に無断駐車し、市に苦情が入ったことがある。現在は、徒歩や自転車で来援するようお願いをしている。
- ◆利用者は自分の区画の野菜をととても大切にしているため、利用者の子どもが別の利用者の区画に立ち入ってしまい苦情が出たことがある。その後、小学生以下の子どもを連れてくる場合は、子どもを見る人を連れてくるようお願いしている。
⇒コロナの感染を心配する年配の利用者もいることから、現在は子どもの出入りを断っている。

【体験型市民農園の利用者】

- ◆年齢層は30～70代と幅広く、夫婦で参加する人も多い。利用者同士でとても良い関係を築いている。ゴルフや女子会等のレクリエーショングループを作り、農園以外でも交流している。
- ◆利用者それぞれが特技を活かして、草むしりや配水、掃除、設備の修理等を自発的に協力してくれる。「～に困ったときは〇〇さんに頼む」等、自然と役割ができていった。
⇒手伝ってくれたら全員にアナウンスをし、感謝の気持ちを伝えるようにしている。
- ◆農園の参加者4人（夫婦2組）が、自発的に農園のブログを開設し、「ブログ班」として運営をしてくれている。
- ◆長年参加している人の中には、農園のやり方ではなく独自のやり方で作業をしてしまう人もいる。
- ◆畑の肥培管理に問題がある区画も出てくるが、それぞれの生活もあるため伝え方が難しい。
⇒個人的にメールをする、班長に温和に注意してもらおう等の対策をとっている。
⇒全員に対する注意は、共有のホワイトボードに書いている。
- ◆週末だけ参加する人や毎日参加する人、あまり来れない人等利用状況は様々であらう。利用者が農園に来ることを考えると、長期間不在にできない。

- ◆野菜が採れすぎて食べきれない、近所の人にもお裾分けしすぎて断られてしまうという利用者もいる。

【市民農園の運営】

- ◆現在は30代の参加者が最も多く、全体の8割を占めている。市外（小平市）からの参加者もいる。
- ◆ポスティングや折り込み広告、ちらしの配布、区画使用料の見直し等を行っているが、安定した集客につながっていない。
- ◆民間の市民農園には市からの補助制度が無い。学生アルバイトの給料含め、農園の維持管理費がかかるため、支援制度があると良い。
- ◆団体であることを伏せて、複数人で1区画を使用するケースがあり困っている。
⇒複数区画を借りていただく等、団体利用に対する対策が必要である。
- ◆環境問題につながる取組をしている。公共的な要素も含むため、市からも協力を得られると助かる。

【農園イベント】

- ◆夏と冬に収穫祭を開き、自宅の庭でBBQや餅つき、窯でピザを焼く等している。準備は参加者がやってくれる。
⇒各参加者が、親族や友人を連れてくるため、60～80人程が集まることもある。
- ◆ブルーベリーの摘み取り体験をやっている。一般の人をいれると本数が足りないため、農園の利用者のみを対象としている。
- ◆カブトムシ相撲大会を開催していて、毎回50組くらいの参加があったが、現在は新型コロナウイルスの影響で中止している。
- ◆毎年ハロウィンや餅つき大会等のイベントを開催しているが、今年は新型コロナウイルスの関係で出来るかわからない。

2-5 情報の受発信

- ◆Facebookやイベント時に観光まちおこし協会が配布の協力をしてきているチラシを見て参加してくれる人が多い。

2-6 コロナの影響

- ◆外出出来ず子どもを遊ばせる場所がなくて困っていた親が多いようで、3月頃から子連れで来る参加者が増えた。
- ◆家で食事をする人が増え、販売が増加傾向にある。

3 取組アイデア

3-1 農x〇〇

- ◆東京工学院専門学校では、学生の地域体験等をカリキュラムに取り込んでいるため、カリキュラムの一環として学生の協力を得られたら助かる。
⇒YouTubeチャンネルやFacebookの更新等を手伝ってもらいたい。

3-2 農の体験・援農

- ◆民間企業（福祉施設等）に農園の会員になってほしい。個人だと、長期的に継続してもらうことが難しいが、企業の場合は事業として組み込んでもらうことで長期的に借りてもらうことができるため経営的にも安定する。